

介護職員自己評価表

2024年8月22日

事業所名	定期巡回・随時対応型訪問介護看護きいれ (認知症ケアチーム)
------	-----------------------------------

	正社員	非常勤社員
看護師	2人	1人
認定特定行為業務従事者	5人	1人
介護福祉士	8人	1人
実務者研修修了者	2人	1人

※複数資格者含む

◆前回の改善計画に対する取組み状況

個人チェック項目	よく できている	なんとか できている	あまり できていない	ほとんど できていない	備考
前回の課題に関する改善	19.8%	52.1%	28.1%	0.0%	

前回の改善計画	
当事業所は認知症のある軽度から中重度の要介護者が多く、日中の活動はある程度維持されている。強いリハビリニーズがあるものの転倒リスクは高く、多くの方が訪問リハビリや通所リハビリを利用して いる。残存機能を活かした自立支援が重要であるが、必要性の判断は難しく、一人ひとりの暮らしぶりを把握した生活リハビリを活かしたケアを提供する計画とした。ケアの提供は、介護職と看護職との連 携だけでなく理学療法士の所見を踏まえたアプローチとして、①自立支援を取り入れたケア、②転倒リスクを踏まえたケアを計画した。スタッフのスキルアップは、資格取得や外部講師による研修等により 目指し、定期的な面談と人事部による面談でフォローを図る計画とした。	
前回の改善計画に対する取組み結果	
着脱をはじめケアにリハビリを取り入れることを心掛けた。訪問リハビリや通所リハビリが提供されている方は、担当の理学療法士と連携し、必要性に応じて自立支援を活かせるケア を選んだ。一方、時間的な制限からご利用者に提供できるケアは限られ、ご利用者の意欲を踏まえた生活リハビリ動作を検討した。転倒リスクは理学療法士による定量的評価に基づ き解消を目指したが、姿勢や身体機能の知見が十分ではなく理学療法士による研修が求められた。一方、バイタルデータは主治医や医療機関と共有され適切な医療連携が実施され た。	

◆今回の自己評価の状況

確認のためのチェック項目(偏差値)	よく できている (60以上)	なんとか できている (50~59)	あまり できていない (40~49)	ほとんど できていない (39以下)	合計
SECTION 1 対象者の接し方や態度について	27.3%	36.4%	36.4%	0.0%	100%
SECTION 2 仕事上の態度について	27.3%	45.5%	27.3%	0.0%	100%
SECTION 3 食事について	18.2%	54.5%	27.3%	0.0%	100%
SECTION 4 移乗や移動について	18.2%	54.5%	27.3%	0.0%	100%
SECTION 5 排泄について	18.2%	54.5%	27.3%	0.0%	100%
SECTION 6 入浴について	18.2%	54.5%	27.3%	0.0%	100%
SECTION 7 着替えや整容について	18.2%	45.5%	36.4%	0.0%	100%
SECTION 8 服薬について	18.2%	54.5%	27.3%	0.0%	100%
SECTION 9 意思疎通について	9.1%	63.6%	27.3%	0.0%	100%
SECTION 10 行動障害について	18.2%	63.6%	18.2%	0.0%	100%
SECTION 11 普通の生活やアクティビティについて	27.3%	45.5%	27.3%	0.0%	100%

自己評価及び改善が必要な事項	
下肢筋力は弱く、転倒リスクの高いご利用者が多く、適切な姿勢でバランスを保つためのケアに努めたが、訪問リハビリや通所リハビリと連携した一貫性のあるケアにつなぐ必要が あった。多くのご利用者の活動量は維持され、有酸素運動等を提供するインフォーマル支援を活かしながら過ごしていた。不足しているケアは、立ち上がる、握る、つかむことに寄 与する自立支援であり、下肢筋力を高めるQOLを向上させるケアを検討すべきであった。運動に対するご利用者の意欲は高いものの、時間および人的余裕から提供できるケアは限ら れ、理学療法士による転倒リスク評価は姿勢や身体機能の知見不足があり効果は限られた。一方、自立支援を活かしたケアは時間を要し、計画との両立が難しく、主任による事例検 討とOJTを通してスキルアップを図る必要があった。ご利用者のバイタルデータを連携医療機関と共有していることで主治医や看護師との連携がスムーズになり、適切な医療連携につ ながった。	
	事業部長 住吉 孝平

外部評価者	
こちらの事業所は定期的な訪問介護サービスや看護サービスを一体的に提供する定期巡回・随時対応型訪問介護看護 の事業所です。自宅療養を支えながら心身の機能の維持・回復を目指す役割があり、残存機能を活かした尊厳ある日常生活につなぐことが重要になりますが、スタッフ配置や業務量の 調整等が問われる難しさもあります。一方、自立支援を活かしたケアは利用者の意欲に影響し、日常動作に合わせたケアが必要になります。多くケアが朝夕に計画されていることから、 人的余裕が不足し、提供できる自立支援は限られ、計画されたケアとの両立に苦労されていました。制度の特徴を活かして、随時支援として残存機能を活かしたケアが提供されてい ることは評価できます。スタッフのストレスや不安は若手スタッフが高く、二次評価より自己評価が低いスタッフが一定数確認できました。ミーティングやスーパービジョンを高頻度で おこなっていましたが、個別事情に応えられる業務シフトを検討するなど、スタッフ負担感や不安に寄り添える仕組みをスタッフと一緒に検討する必要があるかもしれません。総合的 な評価は、適切なスタッフ教育が実施され、医療と介護が連携している様子が推察されました。これからも地域に根ざした事業所として頑張ってください。	
	〒891-0151 鹿児島県鹿児島市光山 2丁目 3-56 特定非営利活動法人かごしま福祉開発研究所 社会福祉学博士 川崎 竜太

